

## 日本人の家族愛

### — 万葉集から昭和万葉集に至るまで —

The Research on The Style of Japanese Family Love

— from the old time poems "Manyōshū" to the nowadays poems "Shōwa Manyōshū"

長友 武

キーワード 万葉集、古代万葉集、家族愛

### 初めに

私たち日本人は古来より稲作を中心とする村落共同体を形成し、その中で家族の絆を培ってきた。すなわち、家族は確固たる労働者の集まりであり、助け合いの場所であった。この論文においては、一三〇〇年前に大伴家持によって編纂された万葉集と、昭和の時代に歌われて、講談社によって編集された昭和万葉集を比較することによって、古来よりほんの六十年前の昭和二十年くらいまでの普通の庶民の家族観を理解することが出来る。古代の万葉集に於いては、歌われた内容がどちらかと言えば、家族愛よりも若い男女の恋愛の歌が中心となっている。少数ではあるが、大伴旅人、山上憶良、その他数多くの防人達の歌を参照して、その時代背景を探る。一方、昭和に出された昭和万葉集に於いては、膨大な数の歌の集成で

あるが、その代表的な歌人達の優秀な歌を挙げ、厳しい昭和の時代の中でいかに家族の絆が強いものであったかを説明する。

#### (一) 古代の万葉集

万葉集の中に、家族についての歌を歌ったのは、前に述べた大伴旅人、山上憶良、防人達であるが、そのほかに筑波地方で歌われた東歌や、額田王などの歌にもみられる。代表的な歌は、

● 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ

いづくより 来りしものそ まなかひに

もとなかかりて 安寝しなさぬ (八〇二)

● 銀も 金も玉も 何せむに

まされる宝 子にしかめやも (八〇三)

この長歌と短歌が万葉を代表する家族思いの歌であり、憶良の人生そのものである。八〇二番の長歌は、旅先で瓜を食べている

と子どもが思い出される、粟を食べるとさらに子どものことが偲ばれる。いったい子どもという者はどこから来たのだろうか、臉にその姿が写ってきて、なかなか安眠が出来ません。それほど子どもという者は、親にとっけかけがえのないものであり、人生の最高の宝であるといっている。

さらにこの気持ちを完成するために八〇三番の短歌を作っている。銀も金も玉もという表現は、その当時最も高価な宝石の代表である。憶良は、これらの宝石を子どもと比較して何の値打ちもないと言いきっている。つまり、人生最高の宝石は、子どもなのだ。子ども以上のものは何もないと言いきっている。

このような家族思いの山上憶良であったが、その何人かの子どもの中の一人、古日という名前の男の子が、三才くらいときに流行り病にて死去し、その人生最大の悲しみを歌いあげた挽歌二首が次の歌である。

● 若ければ道行き知らじ幣は

為む黄泉の使負ひて通らせ (九〇五)

● 布施置きてわれは乞ひのむあざむかず

直に率去きて天路知らしめ (九〇六)

古代の人達が、愛する子どもの死去という人生の最高の不幸な出来事をどのように考えていたかはこの二首を読むと良く分かる。また古代人の死後の世界についての考え、それは、私の研究対

象でもある琉球においては、死後の世界は、ニライカナイの国と言

い、死んだ人たちは、美味しい食べ物や酒を毎日食べ、お酒を飲み、歌を歌って愉快地暮らす、それが死後の世界である。万葉集においては、黄泉の国という表現を使って、そこは、温泉がふつふつと湧き、食べ物飲み物も豊富にあり、みんな楽しく暮らしている国それが古代万葉集の人々の死後の世界であった。

九〇五番の歌は、古日という子どもがあまりにも若いので、天国への行く道が分からない。だから死んだ古日の父親である私は、黄泉の使いに対して、たくさんの賄賂をあげよう。賄賂を貰った黄泉の国の番人は、父親の私をだますことなく、子どもを背負って天国へ連れていってくださいと、そうすると、父親としてとても安心して子どもを天国へ送り出せます。

次の九〇六番の歌は、天国の使いに対して、父親の私は、たくさんの御布施をあげましょう。そして、私は手を合わせ、天国の番人に対して、お願いします。どうか、たくさんの御布施をやったので、私の気持ちをだまさないで、子どもを真直ぐに天国に手を引張って連れていってください。そして、父親の私はとても嬉しい。このような子どもの死に対して、山上憶良は、素晴らしい挽歌二首を残している。このような表現は、山上憶良が若いとき、遣唐使として唐に留学し、儒教や仏教の倫理観を十分に研究していたからこそ出来た歌ではないかと思われる。初唐の王勃という詩人が「裴録事の子を喪へるを傷む」という漢詩を作っている。このような、憶良の優秀な挽歌は、憶良自身の鋭い感受性や、人生の悲しみを強く乗り越えようとする生き方が分かる歌である。

山上憶良臣、宴を罷る歌一首

● 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ

それその母も 我を待つらむぞ (三三七)

この歌においては、詞書にもあるように、普通のサラリーマンが宴会などを抜け出して、帰宅しようとしてもなかなかそれが出来ない。それで体裁が悪いので冗談を含めて自分の本当の気持ちを歌いあげている。この憶良めは、いまこの宴席を退出して家に帰りたいと子どもたちも泣いているだろうから、また、子どもたちのお母さんであり、私の妻も私の帰りを待っているだろうから。この歌においては、三箇所に「らむ」という推量の助動詞を使い、歌全体を軽快な観じにしている。そこに、憶良の、作詩の才能の高さを見ることが出来る。また、家族のあるべき姿について、次のような長歌と反歌を残している。

● 父母を 見れば貴し 妻子見れば めぐし愛し

世間はかくぞことわり もち鳥の かからはしもよ

ゆくへ知らねば

穿沓を 脱き棄るごとく 踏み脱きて

行くちう人は 石木より なり出し人か 汝が名告らさね

天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大君います

この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み

たにぐくのさ渡る極み

きこしをす 国のまほらぞ かにかくに  
欲しきまにまに しかにはあらじか (八〇〇)

● ひさかたの 天道は遠し なほなほに  
家に帰りて 業を為まさに

八〇〇番の長歌において、山上憶良そのものの存在を可能とした父母を見れば尊しという表現をしている。つまり父母との存在は、大変な高い山や美しい谷川のようなもので、拝見するだけで尊いものである。また自分の愛する妻や子どもは、見るだけで心が和んでくる。世の中はそういうふうにして成り立っているのだ。先祖伝来の命のバトンタッチを行うことによって命を次の世代につなぎ、そこに最大の思いやりや愛情を付加することによって人間の発展はあるのだと憶良は言っている。その気持ちをさらに反歌という形で、それぞれの家業を大事にして、家族を愛情を持って養い、しっかりと生きていくことが人間の使命であるということを書いてあげている。

最後に、彼の晩年の作と思われる「貧窮問答歌一首」

この歌は、筑前の守を辞任し、奈良の都に帰った頃、その当時の庶民の苦しい生活状態を見て、歌った歌が次の二つです。

● 世間を憂しとやさしと思へども

飛び立ちかねつ鳥にしあらねば (八九三)

- 富人の家の児どもの着る身無み  
腐し棄つらむ絹綿らはも (九〇〇)

世間一般の苦しい生活を見て、憶良本人が官僚としては、下級に属し、苦しい人間関係の中で生きざるを得なかった宿命をこの二つの歌に感じるのである。その宿命とは、現代の我々サラリーマンにも通じる一種の嘆きでもある。八九三番の歌は、世の中を、つまり上役との関係とか仕事上のストレスとかを嫌だとか、生きていくのが恥ずかしいと思うことがたびたび自分の人生であるのだけれども、今の自分の境遇からは、逃れることは出来ず、そこに運命的な諦めを持つのが普通の人間である。鳥のように、ここが嫌だったら次の楽しい場所に自由に行けたらなぁとそのような歌の気持ちは、現代のストレス社会で苦しんでいるサラリーマンに共通するものがある。

次の九〇〇番の歌は、当時の奈良時代における社会の貧富の差が著しく激しかったかが分かる歌である。富人の子どもは、着る体は一つなのにたくさんの絹や綿の着物を着れなくて、腐らしてしまつて捨て去っている。そんなことなら、それを貧しい家庭の子どもたちに恵んでやったらいいのになぁという、優しい憶良らしい気持ちは表現された歌である。これらの歌を見ても、山上憶良の繊細で優しい家族への思いが感じられる。また、どうしようもない貧困にあえいでいる貧しい人達への同情も感じられる。山上憶良という人は、その歌から想像するに、人生の苦しみの極みを体験しただけに、弱気者、恵まれないものに対する慈しみの情に溢

にむなしかったかがわかる歌である。四四〇の歌は、都に帰ってのひとり寝は、その当時一番苦しいものの代表であった旅以上に もっと苦しいものであったかがよく分かる。

- 世の中は空しきものと知る時し  
いよいよますます悲しかりけり (七九三)

この七九三番の歌も妻の郎女を亡くした最高の悲しみを歌いあげている。太宰府の仕事が終わって奈良の都に帰るときに、来るときには二人で見た景色を帰るときには、一人で悲しく眺めている歌が二首ある。

- 我妹子が 見し鞆の浦の むろの木は  
常世にあれど 見し人そなき (四四六)
- 妹と来し 敏馬の崎を 帰るさに  
ひとりし見れば 涙ぐましも (四四九)

二つの歌に共通することは、愛する妻の郎女と見た景勝の地を帰るときに一人で見ると悲しさを歌っている。特に、四四六の歌は愛する妻が見た鞆の浦のむろの木、海岸に自生する常緑樹であるが、そのむろの木はいつも緑をなしているが、それを見た郎女はもうこの世にいないのだ。また四四九の歌は、二人で見た敏馬の崎を帰るときにたった一人で見ると涙が止まらなさと歌っている。

れていた歌人である。

次に、山上憶良とほぼ同時代に九州の大宰府の長官をしていた、大伴旅人がその愛妻を大宰府で亡くしたためか、その悲しみから逃れるために、山上憶良に作歌の方法を習い、その妻を偲ぶ歌を数多く残している。

五年戊辰、太宰帥大伴卿、故人を思戀ふ歌三首

- 愛しき人の纏きてし敷栲の  
わが手枕を纏く人あらめや (四八三)
- 還るべく時は成りけり京師にて  
誰が手本をかわが枕かむ (四三九)
- 京なる荒れたる家にひとり寝は  
旅にまさりて苦しかるべし (四四〇)

愛しい妻を赴任地の大宰府で亡くし、その悲しみがどのように深いものであったかは、歌を読んでみるとよく分かる。最初の四八三番の歌は、愛しい妻、郎女が亡くなつてもう二度と自分(旅人)の手枕で休む女は持たないと、もう二度と愛する女は持たないと強い気持ちを述べている。また、四三九、四四〇の歌は、任務を終えて奈良の都に帰ったとき、迎える妻も無くて、旅人の心がいか

日本の文学の理念である悠久不変の自然に対して、変わりやすい人間の運命、儚さを歌いあげている。

さらにこの悲しみは、次の二首で決定的になってくる。

- 妹として ふたり作りし 我が山齋は  
木高く茂く なりにけるかも (四五二)
- 妹子が 植ゑし梅の木 見るごとに  
心むせつつ 涙し流る (四五三)

奈良にいるとき、二人で作った庭の築山は、もう何年かの留守生活で雑草が生い茂って、何年か前に愛する妻と汗水たらして造った庭は、荒れ果て、それを見ることによって妻を亡くした悲しみが込み上げてくる歌が四五二の歌である。四五三の歌は、愛する妻が友人宅かどこから持ってきた美しい梅の木を奈良に帰って見るたびに、妻のことを思い出して涙が込み上げてくる。この大伴旅人にとって人生を共にした妻、郎女は最高に優しい女性であったのではないかと思われる。

さらに万葉集では家族について歌った歌は多くの防人達の残した歌にある。古代国家においては天皇や国家に忠誠を誓いそのなかで素敵な家族に対する思いも述べられている。古代から現代の昭和二十年位までの日本人の精神構造のなかに滅私奉公的な考え方が生き続けたわけである。

- 大君の命かしこみ磯にふり  
海原渡る父母を置きて (四三二八)
- 大君の命かしこみ出で来れば  
吾ぬ取りつきて言ひし子なほも (四三五八)

四三二八番の歌は天皇の命令があまりにも恐れ多いので自分の乗っている船が磯に触れて大破するかもしれないけれども自分としてはこの防人の旅に出なければならぬ。自分にとって一番気になることは故郷の村に置いた年取った両親のことである。このように前半分に於いては天皇への忠誠心を歌い、後半分に於いては私的な両親への気遣いを歌いあげている。次の四三五八番の歌も同じような気持ちを歌っている。天皇の命令が恐れ多いので自分は防人に来てしまったけれども、今の自分にとって一番気がかりになることは私に抱き着いて「お父さん防人に行かないで行かないで」と泣いてすがった子どもたちのことが気になってたまりません。この両者の歌から古代における防人達は自分たちとの意志とは関係無く天皇や国家の命令によって防人への旅に行かされていたことが分かる。後になって述べるが、このように公的な事と私的なことの狭間に立って苦しんでいる防人の気持ちは今大戦に召集された学徒出陣兵士の歌や特攻隊員の残した辞世の歌にも多く残されている。庶民の悲惨な叫びの歌でもある。

防人の歌にはさらに純粹に愛する妻との別れを惜しんだ歌が数多く残されている。

- 草枕旅行く背汝が丸寝せば  
家なる我は紐解かず寝む (四四一六)
- 防人に行くは誰が背と問ふ人を  
見るがともしき物思ひもせず (四四二五)

最初の四四一六番の歌は夫を思う優しい妻の気持ちが歌われている。旅という当時の最も苦しいものの代名詞である防人への旅に行かなければならない夫よ、あなたが旅先などで丸くなって寝なければならぬならば家にいる妻である私は帯の紐を解かないで丸くなって寝ましよう。丸寝とは当時の旅人や防人達が岩陰などで眠るとき頭に手を回して背を丸めて眠る習慣があった。それは突然の敵の襲撃に対して反撃する態勢をすぐに取れるような寝方である。夫が旅先でそれほど窮屈な寝方をしている以上留守宅を預かっている妻である私は夫と同じような状態で休みましよう。それが夫への愛情だからと強い夫への思いを歌いあげている。次の四四二五番の歌は夫思いの優しいそして繊細な妻の気持ちが歌われている歌である。現代でも同じであるが女性は井戸端会議をよくするものである。古代も同じく村の集会場である水が湧き出る泉のそばで女性達が集まって井戸端会議をやっている最中にこの作者は通りかかっている。今度防人に行くのは一体どこ誰の夫であろうかと無責任に喋っている人を見るのが腹立たしいことだ、私の愛する夫に防人に行きなさいという命令が来て私達夫婦はその悲しみでもって悲嘆に暮れているのにそのような優

である。

次の四三二七番の歌でもそれが理解できる。防人に行く日が決まった夫は妻を台所に座らせて妻の似顔絵を描いてそれを防人の旅に持って行くこうとしている。この作者は防人に行けと言われてから出発する日までの時間が余りにも短いことを嘆いている。妻の似顔絵を立派で美しいものに仕上げるには十分な時間が必要であると云っている。訳としては私の妻を絵に描き取るだけの十分な時間があったらなあ、そしたら旅に行く私はその綺麗に完成した似顔絵を旅先で朝晩見ながら妻の事を思い出せるのになあ、現実には余りにも時間がないので荒っぽく仕上げた似顔絵を持って行かなければならない。現代の学生達は恋人の写真を携帯電話などに入れて時々恋人の事を偲んでいるようだが、その気持ちは古代万葉人となんら変わる事はない。

- わが妻はいたく恋ひらし飲む水に  
影さへ見えて世に忘れず (四三二二)
- わが妻も絵に描きとらむ暇もが  
旅行く吾は見つつ偲はむ (四三二七)
- 旅衣八重着重ねて寝ぬれども  
なほ肌寒し妹にしあれば (四三五一)
- 葦垣の隅処に立ちて吾妹子が  
袖もしほほに泣きしそ思はゆ (四三五七)

新婚間も無い夫が妻の事を偲んで作った歌が四三二二番の歌である。私の愛する妻は夫である私の事をよほど思い出しているに違いない、それは夫である私が朝晩手ですくって岩清水などを飲む時に私が手ですくった水の表面に妻の面影が映ってそれを毎日飲んでいる。私の妻は夫の事を毎日毎晩考えているのだろう。夫である私も全く同じである。このように強い男女の絆を歌った歌

次の四三五七番の歌では当時多くの家々で隣との境界線を明確にする意味で川原などに自生している葦の木を組んで垣根を作っていた。その垣根の端っこの方に立って私の愛する妻が私を防人への旅に見送るとき袖もじゅくり濡れるくらい泣いて別れを惜し存在がいかに大きなものであったかを夫は歌っている。

次は妻が使用していた旅衣、今で言えば丹前のような着物であろうが旅衣を何枚重ねて着て眠ってもまだ夫である私としては肌寒い感じがする。何故ならいつも肌を直に接して抱き合っていて眠っている妻が傍にいないから。八重着重ねてとか肌寒しという表現を取りながら愛する妻の存在がいかに大きなものであったかを夫は歌っている。

んだ姿が旅先などで思い出されてなりません。袖もしほほにという表現は涙でもって袖が雑巾のように涙をたくさん含んだという表現ですが少しオーバーな表現だがいかに当時の新婚間も無い夫婦の別れが辛かったかは想像出来る。私の一番好きな現代歌謡で船村徹先生作曲の『別れの一本杉』という歌がある。東京に出た男性が故郷の村に恋人を置いてその別れの場面を思い出している。歌の歌詞は次の通りである。「泣けた泣けた堪え切れずに泣けたっけ あの子と別れたあの夜の山のかけすも泣いたっけ りんごのような赤いほったのよ あのお涙」我々中高年の人生の応援歌のような歌であるがその心は万葉集の四三五七番とそっくりである。

さらに妻子持ちの防人達は妻の事、子どもの事また自分の両親の事を偲んで次のような歌を残している。

● わる旅は旅と思ほど家にして

子持やすらむわが妻かなしも (四三三三)

● 防人に発たむ騒ぎに家の妹が

なるべき事を言はず来ぬかも (四三六四)

● 行こ先に波なとゑらひ後方には

子をと妻をと置きてとも来ぬ (四三八五)

● 韓衣裾に取りつき泣く子らを

置きてぞ来ぬや母なしにして (四四〇一)

責任を感じていたわけだから現代のサラリーマンはもっと生命保険に加入しなければならぬとの映像を流していたことが思い出される。まさに家族思いの夫の歌である。

次に四四〇一番の歌は何人かの子どもを残して父子家庭である私は旅に出て来てしまった。子ども達の事を、また彼らの生活を心配している様子がよく分かる。訳としては韓衣(当時旅に行く時などに着られた裾の長いズボン状の着物である。埴輪の兵士の像を想像して頂くとよく分かる)その裾に抱き着いて、お父さん防人に行かないで、行かないでと泣く子ども達を振り切って防人への旅に出て来ました。そういう私の家庭ではあの子どもたちのお母さんである私の妻はもうすでに病気が何かで亡くなってしまっている。あの子ども達のが気になってなりません。子ども思いの優しい父親の気持ちが歌われた歌で最近よく新聞紙上で報道されている幼児虐待や幼児殺人などの加害者である親に読ませたい歌である。

その他防人の歌には防人に行く兵士が親の事を偲んで歌った歌がある。

● 時々の花は咲けども何すれぞ

母とふ花の咲き出来すけむ (四三三三)

● 水鳥の発ちの急ぎに父母に

物言ず来にて今ぞ悔しき (四三三七)

最初の四三三三番の歌ではこの時代の防人である夫は自分の身はどうなってもいい、妻の事が一番心配だと言っている。防人である男性の私はその当時苦しいものの代名詞であった防人への旅は苦しいものだと思って諦めておりますが、私にとって一番辛い事は留守宅にいて何人かの子どもを育て瘦せ衰えているであろう自分の妻の事を考えるのが一番辛い事である。現代のサラリーマン達は子どもの教育や家の事情の為に単身赴任を余儀なくされている人達が多い。不肖、私も十年に及ぶ単身赴任生活を送ったがいつもこのような気持ちで家族の事を考えて仕事に励んでいた。この歌もまた現代のサラリーマンに共通する気持ちを歌いあげた歌である。

次に四三六四番の歌は防人に出発する騒ぎに紛れてしまっ愛する私の妻が業るべき事(すなわち農作業の仕方とか種籾の保存の仕方や稲の蒔き方)などをゆっくり教えないで防人の旅に来てしまった。私の妻が私の留守中にすっかり生きていくかどうか心配でならない。妻の生活の事を異常に心配している歌である。

次の四三八五番の歌は波なとゑらひという表現をとりながらも子どもや妻の生活に責任を持った現代サラリーマンの気持ちも歌っている。訳としては防人に行く為に乗った舟の前方に荒波よ襲ってくるな、もし荒波が来て舟が沈めば今船出した港に子どもと妻を置いて防人に来たばかりだから。古代の防人である夫がその子どもと妻との生活に全責任を感じていた事が分かる歌である。今から四十年程前のテレビのコマーシャルである生命保険会社がこの歌を取り上げ、古代の夫達は妻や子どもの生活にこれほどの

● 父母へ齋ひて待たね筑紫なる

水漬く白玉取りて来までに (四三四〇)

● たらちねの母と別れてまことわれ

旅のかりほに安く寝むかも (四三四八)

親が子を、また子が親を大切にするというのは古今東西国柄を隔てることなく人間普通の感情であると思われるが、万葉集においては子どもが親を偲んで歌った歌の中に優秀な歌があるのでここに表記する事にした。

最初に四三二三番の歌は防人という旅が一年二年経ってその中で四季折々の花が咲く、それを鑑賞する度にこの作者の防人はお母さんの顔形をした花は何故咲かないのだろうと嘆いている。それ程別れた母に会いたい、また別れた母は元気にしているだろうかと心配している気持ちを歌いあげている。

次の四三三七番の歌では、「水鳥の発ちの急ぎに」という縁語的表現を使いながら水鳥が水面をバタバタと急いで飛び立つようにして防人の旅に出てきたものの、お父さんお母さんにもっとゆっくりお喋りしてこなかったことが今くやまれてなりません。もっとゆっくり父母と話し合ってくれば良かったと後悔している気持ちが歌われている。

次の四三三〇番の歌においては、その当時筑紫(福岡県)の水漬く白玉(海の天然真珠)は中央の都近くから赴任した防人達にとっては憧れの品物であったに違いない。だから筑紫に赴任する私

(防人)としては、父母へ天然真珠をお土産に持って帰るまでどうか長生きして健康に気をつけて私の帰りを待っていてください。このように父母への純真な親孝行の気持ちを歌いあげている。話は余談であるが、私はこの大学で学生達の就職に熱心な教員の一人である。ある真珠製造メーカーに学生を送りこむ時、この万葉集の歌を相手の会社の人事部長に話した事がある。それ以来人事部長はその私の話に感激を覚え会社の社報にこの歌を載せ、万葉の時代から日本人は真珠を愛用していたという文句で真珠会社の宣伝に使っている。まさに面白い話である。

次の四三番の歌は少年の防人の歌であろうが、愛する母と別れて本当に私は防人の旅の岩陰などに作った簡単な宿に安らかに眠る事が出来ようかと、最愛の母と別れて防人の旅には行けないのではなからうかと心配している気持ちが歌われている。

このように、親孝行の気持ちを歌いあげた歌は万葉集巻の二十の防人の歌には数多く見られ、これもまた現代の尊属殺人事件や親不孝な出来事を起こす子ども達に是非教えてあげたい歌である。

## (2) 昭和万葉集の歌

昭和の代に出された歌集を集大成した物が「昭和万葉集全十九巻」である。この本は講談社から出版されているが、残念ながら今は絶版となっている。私は市民の人達によく講演する機会があるので、この昭和万葉集から歌を引用して家族の在り様について講演している。この昭和万葉集は上は天皇・皇后陛下、総理大臣あ

るいは指令長官の歌から下は一般兵士、この人達は現代の防人とも言うべき悲しい運命を背負わされた下級兵士達であるが、そのような人達の歌が時代ごとに並べられている。激動の昭和と言うべき時代を生き抜いたその人達の魂の叫びの歌が昭和万葉集である。このたくさんある歌の中から家族にまつわる歌を何首かここで引用し、日本人の家族観について考えてみる。私は太平洋戦争末期、昭和二十年七月八日にこの世に生を受けた。両親の話によると、東京の大空襲の中で防空壕の中で母親は私を産んだそうである。つまり、日本が終戦という大変な時に私は産まれ育った。大学生になって学問分野を決める時、私は律儀で純粋な日本人の生き方に興味を覚え万葉集を専攻した。そして万葉集の歌と現代の歌の間に何か関連があるのではないかと思ひ、研究を深めるようになった。一言で言えば万葉の時代から昭和二十年頃までの日本人の生き方、考え方は全く同じで寧ろ昭和の人達は古代の万葉の精神を引き継ぎそれを実行していたという事が分かり、そこに深い感銘を覚えた。これら数多くの昭和万葉集を五つくらいのジャンルに分け、その代表的な歌について解釈を加える。

### ● 祭壇に届かぬ吾子の手を取りて

戦死の夫に焼香をさす (戦争未亡人 肥留川ナツ)

### ● 遊びいる子呼び寄せて手を握り

静かに父の戦死をば知らせぬ (戦争未亡人 道久友子)

### ● たはやすく死をねがふ心をいまして

子等の寝顔に口よせぬあはれ (戦争未亡人 倉田敏子)

最初の肥留川ナツさんの歌はまだ一、二歳の赤ちゃんを持った戦争未亡人で戦死の知らせを受けた夫の祭壇に届かない小さな手を取って、戦死の夫の肖像に對して焼香をさせている若い母親と一、二歳の小さな幼児が祭壇に手を合わせている姿が想像出来る。この母親は夫の霊前において夫が残したこの子どもを強く育てあげるといふ決意を誓っている。私達の世代の中には小学校のクラスメイトの中でも四分の一くらいの友人が父親を戦争で亡くしている。この歌に似た話をよく友人から聞いたことがある。

次の道久友子さんの歌も戦争で夫を亡くした戦争未亡人の歌である。田舎の農村の広い庭で何人かの子どもが楽しげに歓声をあげながら遊んでいる。そこに役場の職員がつらそうな顔をして一枚の戦死の公報を知らせに来る。その知らせを恐る恐る開封した母親は涙を流す事はせず三、四人の自分の子どもを呼び寄せて皆の手を握りながら、あなた方の尊敬するお父様は戦地で亡くなったのだから今後は皆しっかり励ましあって勉強して立派になりましょうと、涙を堪えて子ども達に父の死を冷静に話そうとしている。このような姿に日本女性の強さといじらしさを感じる。きっと子ども達がまた遊び始めたらこの女性はわっと泣き崩れるのである。私は大学の教師という地位に就いてからはこれら戦争未亡人の為の講演会や社会復帰の為に全力を尽くしてきた。あの終戦後何もなかった時代、私の家庭には健康で明るい両親がいた。

しかし戦争で父や夫を亡くした戦争未亡人の家庭は言葉では言い表せないくらい悲惨なものであった。そういう家庭に私の母はよくお米を届けていたのが少年の頃の記憶に残っている。

次の倉田敏子さんの歌は戦死の公報が来て悲しみに打ちひしがれ夕食も喉を通らずやと寝かした二人くらいの幼い子どもの寝顔に接吻をして明日にでも一家心中をしようという自分の気持ちを叱って子ども達に接吻をしているこの私達一家は哀れなものだと言っている。今大戦において数多くの戦死者を出し、その影でこのような悲惨な境遇に置かれた戦争未亡人達が我が国にたくさんいたことを人間として忘れる事は出来ない。きっとこの倉田敏子さんはその後子ども達を立派に育てあげたのでしょう。この歌の中に日本女性のいじらしい気持ちが歌われ、私が昭和万葉集の中で最も好きな歌の一つである。

さらに夫を亡くした戦争未亡人達の歌は数多くの秀歌が見られる。

### ● 三人の子国に捧げてなかざりし

母とふ人の号泣を聞く (二上範子)

### ● 手を胸に入れて触りたる両乳の

かなしかも吾は夫なしにして (高山房代)

### ● 葬るべき遺骨だになし臍の緒を

姑は取り出だし納め給ひぬ (岸岡のぶ)

● 吾が待ちし夫は還らず封書にて  
送られて来しこれの遺髪よ

(飯島彥以)

最初の二上範子さんの歌は終戦の天皇による玉音放送を聞いた時、三人の愛する子ども達を昭和十六年から二十年までの間に戦争で亡くしてその悲しみをこらえていた母が終戦という厳しい現実をむかえて、一体三人の息子達の死というものは何だったのだろうか、無駄死にだったのではなからうかと言って泣き叫んでいる声を嫁の私は今聞いている。そういう私の夫がその三人の子ども一人なのである。自分が尊敬している最も強い姑が終戦の時に泣き崩れている姿をよく歌いあげている歌である。

次の高山房代さんの歌は夫の戦死を受けて夜など自分で自分の両乳に触れ、戦争にいくまで自分を大切にしてくれ、愛してくれた夫はもうこの世にはいないのだ。自分の身が悲しくもあり哀れでもあると嘆きの気持ちを歌いあげている。

次の岸岡ノブさんの歌は私の夫の母であり私にとっての姑は、私の夫の戦死の公報が入ると夫がこの世に産まれたときのへその緒を取りだして、それでもって葬式をしました。最初の「葬るべき遺骨だになし」の表現が、遺骨すら全くない悲しい葬式を表している。きっと中国大陸などの奥地で亡くなり、遺品の一つもない悲しい葬式であったのだろう。

次の飯島彥以さんの歌もこの歌と共通している。私の愛する、帰りを待っていた夫は生きて帰らず、封書の中にほんの少しの髪の毛が、これが遺髪であるとして送られて来ました。今の作者の

夫の帰りを今か今かと待っている妻達はその夫の消息を一秒でも早く掴みたいけれども、それがはっきりしないのでいらいらとして毎日帰りを待っているのが想像出来る。夫が生きているかどうかははっきりしないけれども早く自分の胸の中に帰って来いと、その気持ちを真夜中などに空に向かって夫よ早く帰って来い!と叫んでいるいじらしい妻の姿が想像出来る。

次の津金さんの歌は、私の愛する夫は近々元気で帰ってくるという噂を聞いた。真夜中に台所などで鼠等の小さい音に対して、今、主人か帰ったのではなからうかと思って台所の戸を開けたりする、これほどあなたの帰りを待ち望んでいる私なのですと、最愛の夫の一日も早い復員を待っている妻の気持ちがよく歌われている。

次の大野さんの歌は、ある村で何人かの友人の夫達が早めに復員したけれども私の夫はまだ復員して来ない。独りで寝る夜は愛する夫の事を考えると胸の痛みを感じる。先に夫達が帰ってきた友人達を妬む気持ちではないけれども、あの人達の家庭が羨ましくてたまらない。実にいじらしいほどの優しい妻の気持ちが歌い上げられている。

次の永岩さんの歌は、役場から愛する夫が何月何日に復員するという報せを受けて、その復員する前の日の夜に心身が興奮してなかなか眠れない。庭には光々と月が光っている。美しい一枚の絵のような歌である。

次に戦争に赴いた現代の防人ともいうべき兵士達の歌を紹介する。

気持ちはこれ以上表現出来ません。このように最高の悲しみの気持ちをこの歌に歌いあげている。

このように愛する夫を戦争で亡くした妻達は、その悲しみを五・七・五・七・七という限られた、決して上手とは言えないけど純真で素朴な気持ちを歌いあげている。私は平成十三年八月十五日の「戦没者を追悼し平和を祈念する日の集い」で戦争未亡人達を前にしてこれらの歌を披瀝したが、故松形元宮崎県知事を初めとして会場からすすり泣く声が聞こえ私自身も涙にむせながら話した事を記憶している。

次に夫の帰りを今か今かと待っている夫人達の歌がある。

夫の帰りを待っている妻達の歌

● 声あげて呼ばはむ夫や生死も

(福本恒子)

● 復員の噂聞きたり真夜中の

(津金美佐子)

● 夫還る友等をねたむにあらざれど

(大野小夜子)

● 君還る報せの前に戦きて

(永岩ちづ子)

● 召集令状来るを身近に感じつつ

(遠藤秀男)

● 妻の写真持ちて行かむをためらへり

(近藤芳美)

● 攻撃に向ふ機上に我が妻の

(田中武克)

● 事しあらばひとり身通す覚悟とふ

(藤倉晴儀)

● 新米を餓ゑたるわれに炊き給ふ

(中村泰助)

● シベリヤの奥地に夢見し吾が妻を

(鱒元登美数)

最初の遠藤さんの歌は召集令状という当時の日本人にしては拒否できない命令が近々自分に来るだろう、それを感じながら決して豊かではないがとても平和な夕食を妻子ととっている自分である。出来れば戦争など行かずに今のままの平和な楽しい生活を続けたいと素直に自分の気持ちを歌いあげている。

次の近藤さんの歌は前に述べた千三百年前の防人が自分の愛す

る妻の似顔絵を急いで描いて持っていかうとする姿と同じ気持ちで歌っている。妻の写真を奉公袋に恥ずかしそうに仕舞っている若い夫の兵士の姿が浮かび出ている。

次の田中さんはパイロットの仕事に従事している軍人であるが、攻撃命令を受け急いで空中に舞い上がる飛行機の機上に私が出征する時に別れた心配そうな青白い妻の顔が突然浮かんできました、と死に直面している時最愛の妻の姿が眼前に浮かんできたと言っている。

次の藤倉さんの歌は、もし愛する夫よ貴方が戦地で不幸にして戦死するという事があったとしても残された妻の私は絶対に再婚はしないで独り身を通すという決意を述べた手紙が自分の荷物より出てきて改めて妻の愛の深さが感じられ、感激している夫の気持ちが歌われている。

次の中村泰助さんの歌は満州各地で捕らえられた日本兵士がシベリヤの奥地に捕虜として送られ、毎日黒パン一つの食事で強制労働に従事させられたという史実がある。十万人捕虜として捕まり、七万人の人が栄養失調や病気で亡くなったと言われている。餓えに苦しみながら労働していた中村さんは自分の為に新米を炊いてくれたお母さんの姿を抑留中に夢見て食べようとしたら目が覚めてしまい夜中に一人で泣いている姿が想像出来る。とにかく悲惨な現実の中で母の事を考え、早く帰国出来る事を夢見た歌である。

次の鱒元さんの歌はシベリヤでの抑留中に夜など愛する妻の事をいつも夢に見ていた私ですが、無事に日本に帰国して故郷に帰る事を歌っている。

次の福川さんの歌であるが、満州より無事に復員した私の頭を撫でて本当にお前は徳一かと母が感激の涙を流し、子どもを抱擁している姿を歌いあげている。平凡な表現の中に前の歌と同じく平和に復員した喜びを歌いあげている。

#### 特攻隊員の歌

今大戦において六千人以上の十六歳から二十四、五歳ぐらいまでの若人が特攻隊員として飛行機にたくさんの爆弾を積んで南海の海に散っている。次の歌は昭和万葉集に掲載された歌ではなく、私実際に現地に赴いて特攻隊員の歌碑を写真を撮り収集したものである。

● 帰るなき機をあやつりて征きはや

開聞よ母よさらばさらばと (鶴田正義)

● みんなみの雲染むはてに散らんとも

くいの野花とわれは咲きたし (高崎文雄)

● 南海にたとへこの身は果つるとも

いくとせ後の春を思へば (永峯肇)

最初の鶴田正義さんの歌は鹿児島県の知覧特攻基地で歌われた

ってみると愛する妻はもう今は弟の妻になってしまっている。きっと誤報の戦死の報せが故郷の実家に届き、すでに戦死した夫であるのでまだ若い妻はその弟の妻になってはどうかとの村の長老の勧めもあり、弟の妻になったのである。帰ってみればこの悲惨な現実遭遇し、自暴自棄になっている私である。この辛さは生きて地獄にかえるような辛さであったのであろう。私の育った村にも同じような事があり、シベリヤから帰った兵士は故郷を棄て東京に出たという話を聞いている。同じような話が日本全国にたくさんあったのであろう。この人達も戦争による深い傷を負ってその後を生きなければならなかった人々である。

次に、無事に日本に復員してきた兵隊達は次のように元気に復員した様子を歌に表している。

● 涙浮べ駅に迎ふる母見れば

生きるしことは斯くもうれしき (小国孝徳)

● 満州より帰りし吾の頭なで

まこと徳一かと母泣き給ふ (福川徳一)

小国さんの歌は辛い辛い中国や満州の戦線を終えて体に傷一つ受けることなく、無事に故郷の駅に立った兵士とそれを迎える母が抱擁しあって生きて復員した事に対する喜びの気持ちを歌いあげている。田舎の駅舎で老母と若い兵士が抱擁し合い、一枚の絵写真の様な感じのする歌である。平和の尊さや、平和のありがた

歌であるが、この鶴田正義さんは偶然にも操縦していた飛行機が徳之島に不時着し、戦後鹿児島県の南洲神社の宮司をされ同僚の亡くなった特攻隊員達の供養をなさった方である。帰る事の出来ない飛行機を操縦して飛び立ちはしたが開聞岳よ、お母さんよ永遠にさようならさようなら、と悲しい気持ちを歌っている。知覧基地に行って取材した事であるが、知覧基地を飛び立った特攻機は開聞岳の傍を通るときに回翼を振って進路を南に向けたそうである。彼等は死ぬときに母親の名前を叫んで死んでいった隊員が多かったと思われる。多くの特攻隊員に共通した気持ちをこの歌は歌いあげている。

次の高崎さんの歌は、日向市の馬が背公園の広い芝生の上に石碑として建てられている。日向市出身の高崎さんは昭和十九年にフィリピンで戦死なさっている。この高崎さんが妹に宛てた望郷の歌の中にこの歌は入っていた。高崎さんの事を知った故郷の人達はその功績を称えようとして馬が背公園にこの歌碑を建てたわけである。歌の意味は、南のフィリピンの雲が茜色に染まる向こうに自分は特攻隊員で散るけれども今度生まれまるとときは故郷の野山に咲いている白百合のようにして美しい花として咲きたいものだなあ。馬が背公園の丘の南向きにした石碑としてこの歌碑は建っている。

次の永峯肇さんの歌は前の高崎さんと同じような歌の流れでもってご本人の気持ちを素直に歌っている。永峯肇さんは宮崎市住吉の出身で昭和十八年十月二十一日のフィリピンのフィナツボ火山近くの基地から他の四人の特攻隊員と共に飛び立ち敵艦に体当



たりされた方である。この五人の特攻隊員達は敷島隊と名付けられ、五人は軍神として祭られているが、私はこの方の弟になられる永峯重信先生とは入魂の間柄であり、平成八年にこの方の歌碑を宮崎神宮内の護国神社に建立する話があり、私は学識経験者代表としてその碑の建立に参加した。その時九十歳近くの肇さんのお父上も参加され、私としては涙を禁じ得なかった。この歌の意味は、自分は日本で最初の特攻隊員としてフィリピン沖で敵艦に当たり、命を落とすけれども何年か後の日本の平和で平穏な状態と我が永峯家一族の繁栄を願えば自分の死はそれで十分である。このように自分を犠牲にして国家や父母兄弟故郷の繁栄や発展を願った特攻隊員達は多かった。私の人生においてこの永峯肇さんの歌碑の建立に心血を注いだ事は自分の誇りでもある。

さらにたくさんの特攻隊員の辞世の歌が鹿児島県知覧基地や鹿屋基地に残されているがこれらに共通する事は自分達の死という犠牲の上に一族郎党の繁栄や国家の安泰を願った歌が多い。我々が想像するほど勇ましくてたまらないほどの歌は数少ない。

#### 学徒出陣兵士の歌

- 指をかみ涙流してはるかなる

父母に祈りぬさらばさらばと

- 眼をとちて母を思えば幼な日の

いとし面影消ゆることなし

(木村久夫)

この学徒出陣兵士は太平洋戦争末期になると兵士の不足が叫ばれ、文科系の大学生が卒業年月日を一年ほど繰り上げ、戦場に赴かざるを得なかったのである。昭和十八年十月二十一日の秋深む神宮外苑競技場にて約七万人の学徒出陣兵士を送る大会が催されている。その日偶然にも大雨が帝都を襲い、大雨の中を銃を持って行進する若い学徒達に対して国民は割れるほどの声援を送ったのである。東京帝国大学文学部三年生江橋慎四郎氏が学生達を代表して時の東条英機首相の前で「我々はただいまからペンを棄て銃を取り国家防衛に当たるといふ決意」を述べている。この木村久夫さんは京都大学から学徒出陣兵士として参加している。戦争が終結した後にシンガポールにて戦犯の汚名を着せられ弁護士もつくことなくB級戦犯として処刑されている。その辞世の歌がこの二首である。

最初の歌は十三階段を登る時自分は無実の罪で異郷の地シンガポールで悲業の死を遂げる事になるが遙かな日本にいる両親の健康を願って天国に参りますと歌っている。

次の歌は眼を閉じてお母さんの事を考えると自分が幼少の時とても自分に優しくしてくれたお母さんの面影が消える事はありません。この様に木村久夫さんは両親の優しさや恩恵に対して感謝の気持ちを歌いあげている。

私は自分の人生においてとてもドラマチックな色々な人達との出会いがある。昭和五十八年四月鹿屋体育大学の創設準備委員、助教として日本で初めての社会体育の指導者養成という崇高な建学の理念でもって創設された鹿屋体育大学に赴任した。時の初

代学長が学徒出陣兵士壮行会で学生代表として挨拶した江橋慎四郎氏であった。江橋先生は終戦後東大に戻りその後東大大学院を卒業して東大教授になられ偶然にも昭和五十八年に鹿屋体育大学初代学長として赴任されました。毎年八月十五日になるとマスコミ各社が鹿屋体育大学に江橋先生を尋ね、学徒出陣についての意見を求める事があった。先生はいつも目を閉じて沈黙を保っていたのを記憶している。きっと先生も色々と話したい事があったであろうが今も東京で学者として活躍されているがこの事に対して沈黙を守っておられる。

さらに私は鹿屋体育大学に赴任する前に昭和四十九年四月から昭和五十八年三月まで琉球大学に文部教官助手として勤務した。その時の国文科の主任教授が仲宗根政善教授である。この方は沖縄が米軍から攻撃された時のひめゆり部隊の引率者であった。終戦後、米軍が経営する琉球大学の教授となられ琉球の平和な戦後創設のため頑張られた。先生も前の江橋先生と同じくあまりひめゆり部隊の事は公式の場で話されませんでした。

私は以上の昭和史に出てくる二人の有名な先生のもとで教育研究生活をしてきた事が誇りでもある。この方々が専門の学問分野ばかりでなく私自身に平和の尊さ、人命の尊厳さを身をもって教えてくれた大先輩である。

#### 結び

私は今回の論文において古代の万葉集から現代の昭和万葉集を

引用して日本人の家族愛について述べたわけであるが、一言で言うとう日本人ほどいじらしい純粋な気持ちを持った民族は他にいないのではないか、そして日本人ほど平和を尊ぶ民族はいないのではないかと思うようになった。太平洋戦争が始まる時米国の国会は時の社会学者ルースベネディクト女史に依頼して日本人の天皇に対する考え方、国家に対する忠誠心、日本人の家族愛などについて調査を依頼している。依頼された女史は「菊と刀」という本を著し報告書という形で提出している。菊を作ったりする平和な気持ちと刀に代表されるような戦争を好むその両者の矛盾に対してルースベネディクト女史は論述している。

江戸時代の国文学者の本居宣長は日本人の心というものを次のような和歌で表している。

- 敷島の和心を人間はば  
朝日に匂ふ山桜花

一口に言うとう日本人の心は決して表面的に強い愛情表現や訴える言葉を使わないけれども、心の奥底に秘めた優しさとか思いやりとか、という気持ちが地下水のように流れている。これが日本人の心である。

私は学問にめぐりてから今まで国文学を中心にして研究してきたわけであるが、その中でこれらの歌を今回自分なりの注釈を加え発表する事によって自分なりの平和教育と平和学を少しでも確立し、多くの学生達にこの事を話しかけていきたいと思う。

最後に情報化社会、国際社会において世界の戦争や紛争が一日も早く終結し世界の人々や日本人すべてが平和に毎日を送れることを望み、筆を終わりたい。

### 参考文献

- 1.. 『万葉集秀歌上下』 岩波新書
- 2.. 『万葉集 1～5』 岩波古典大系
- 3.. 『鑑賞万葉集』 東京学術図書出版
- 4.. 『昭和万葉集』 講談社